

プロジェクト X ~酪農民と雪印のあゆみ~

今年2020年は雪印乳業食中毒事件(2000年)から20年の節目の年を迎える。そこで事件から20年を迎える今、【プロジェクトX】では酪農民と雪印の歩みを振り返る。第5回は新時代の幕開けと食中毒事件について(引用文献:連盟記念誌、酪農風雲録)。

「激動の昭和から平成へ、新たなステージに」



農林水産省草地試験場での参加者(H8)

その後も酪青研は会員数・規模を拡大させていき、激動の昭和は終焉を迎え、新時代「平成」が幕を開けたのであった。平成に入ってから、農産物市場は急速に開放が進み酪青研は研究目標に「豊かな生活とゆとりある経営の確立」を掲げた。当時はわが国酪農・乳業が国際競争に打ち勝ち、安定的発展をめざすために牛乳・乳製品の低コスト生産、消費者ニーズに対応した高品質乳の生産など地域社会に密着した生活の充実を酪青研で実践することとした。そのための項目として

①情報化社会に適応できる経営者能力の涵養②国際化に対応できる乳肉の生産③地域社会に密着した生活の充実を重点に展開してきた。こうして新時代の幕開けと共に酪青研は組織の強化育成を目指し、日本連盟役員が自ら各協議会へと出向き、積極的な全国教宣活動を実施していく事になった。その結果、酪青研組織の基盤はさらに強化され盤石なものとなっていった。

「創立50周年、21世紀に大きく飛躍する組織へ」

平成7年は歴史的な大きな節目を迎えることになる。ガット・ウルグアイラウンド協定の開始だ。酪農・乳業界にとって、「自由化元年」として新たなスタートを切ることになる。この新たなスタートに向け酪青研は事業展開をより具体化するために、単研・協議会・日本連盟の活動はより積極的に行われた。

これにより組織の活性化や活動の充実など、一定の成果を挙げたのであった。そんな道半ばの平成8年、初代委員長を務められた太田正治委員長が逝去された。太田委員長は生前、3代目日本連盟委員長であった加藤孝光氏にこんな言葉を残している。「歴史というものは単に時間の経過の記録だけではなく、人間がその生涯をかけて描き続けてきた素晴らしい絵画である。人は自ら歴史を創り、またその歴史によって感動し励まされ前進する。」この言葉は21世紀を生きる我々に今も力強いメッセージとして生き続けている。平成9年には、酪青研は創立50周年を迎え、記念式典を盛大に開催した。

それに伴い50周年記念誌や記念講演も開催された。当時の酪青研組織は全国6協議会、57地方連、202単位研究会、代表会員2,034名を誇り組織の成熟度や新たな時代に向けた意気込みも強く、まさにピークとも言うべき時期であった。

「激動の雪印乳業食中毒事件と大混乱の酪青研事務局体制」

平成11年に開催された全国大会(神戸市)では21世紀を目前に控え、大会の内容も8題の経営発表をはじめ、講演会、経営分析検討会も開催され、その熱意溢れる雰囲気はとても印象深いものであったと当時の事務局は振り返っている。神戸大会の余韻も覚めやらぬ平成12年6月雪印乳業食中毒事件が発生。過去に例を見ない規模の被害拡大が進む中、発生工場の大坂工場のみならず全国の市乳工場でも自主的な操業停止を余儀なくされる状況となった。当時は現地事務局としての機能も混乱し、酪青研運営にも暗い影響を及ぼすことになる。

食中毒事件の原因追及が長期化するに伴い、雪印乳業の経営状態は日に日に悪化し、酪青研運営に不可欠である事業助成金はその30%もが削減された。更に追打ちをかけるように全国の複数の地区で組織脱退の動きが広がり、酪青研の組織運営に大きな痛手を残した。

その年に開催された第53回全国大会(札幌市)は、事務局体制も大混乱の真っ只中にあり、華やかな大会とは裏腹に今後の酪青研存続への不安が募る中、会場全体は大変重い雰囲気に包まれていた。混乱の最中にあった事務局体制については酪青研会員からの叱咤激励に支えられ従来の落ち着きを取り戻しつつあり、雪印乳業の再建とともに組織の再構築に向けて動き始めたのであった(続く)。



お客様への謝罪に追われる雪印乳業社員(H12)



食中毒事件を伝える当時の新聞記事(H12)



発行人:日本酪農青年研究連盟 十勝協議会 会長 高野 修一
事務局:雪印メグミルク(株) 大樹工場内(十勝協議会事務局 大山冬馬)
連絡先:TEL;01558-6-2121 FAX;01558-6-2124



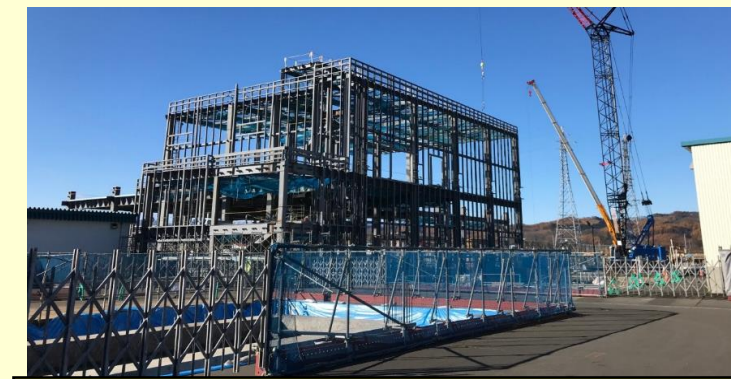
大樹工場通信 -カマンベール新棟工事開始-

既に報道やニュースでもリリースされておりますが、雪印メグミルク大樹工場では、生産ラインの老朽化に伴う包装工程設備の更新と「カマンベールチーズ生産拡大に向けた投資」を行うとし、現在カマンベール新棟の建設を行っています。2020年6月から工事を着工し、2022年度中には稼働予定となっております。

約4年程前にカマンベールの認知症予防効果についてTVで取り上げられたことを機に、爆発的に売れた際には一時供給不足になった経緯もあり、その後も需要が堅調で消費量が一段上がったことから、設備更新を機に増産体制に踏み切ることになりました。直近では、新型コロナウイルスに伴う“巣ごもり需要”で、家庭で食事する回数が増えたことや家飲みの拡大から、家庭用チーズは全般的に伸長している状況です。今後も定期的に新棟建設の様子を皆様にご報告していきますので、ぜひ温かい目で見守って頂ければ幸いです。



2022年完成予定図です!近代的でかっこいい!



11月現在の建設現場写真です!着々と工事が進んでいます

お悔やみ 元日本連盟常任委員 前田昌文さんを偲んで



元日本連盟常任委員でありました前田昌文さん(大樹町在住)が2020年11月13日(金)に62歳でご逝去されました。7月にご子息である竜志さん(現:大樹単研会長)の酪青研会報誌取材でお伺いさせて頂いた際には元気なお姿を拝見していただいただけに悔やみきれません。

昌文さんは1997年(平成9年)に大樹単研会長に就任。2年後の1999年(平成11年)には南部十勝地方連委員長に就任され、2001年(平成13年)には十勝協議会会長、北海道協議会役員を兼任され、十勝のトップとして酪青研活動の活性化にご尽力されました。誰とでも打ち解けられる優しい人柄と酪青研活動に真摯に向き合う性格から、2002年(平成14年)には日本連盟常任委員に就任されました。日本連盟の役員として全国の酪青研盟友のために尽力され、近年では大樹町農業協同組合の理事の職も務められ、その活躍ぶりは大樹町、酪青研にも欠かすことのできない存在となっております。この「十勝のチカラ」も毎回欠かさず読んで頂いており、これからも頑張ってください!など、とても嬉しいお言葉もかけて下さいました。あの優しい笑顔にもう会うことが出来ないと思うと、今も信じられない気持ちでいっぱいです。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます(ご遺影の提供:前田竜志さん)。